

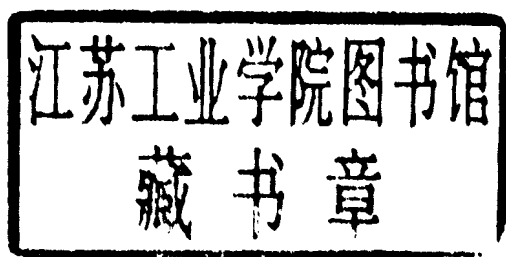
年刊歌集

一九八九年版

日本歌人々

# 年 刊 歌 集

1989 年 版



日 本 歌 人 ク ラ ブ

平成元年8月31日印刷  
平成元年9月10日発行

## 年刊歌集 一九八九年版

編集者 年刊歌集編集委員会

発行者 水上正直

発行所 日本歌人クラブ

〒一五一

東京都渋谷区代々木2-23-1  
ニューステイトメナー八四七号

電話

〇三―一九九―六五八五(代表)

振替

東京 八一―三二二七四番

印刷所

新日本印刷株式会社

〒一六二

東京都新宿区市谷本村町3-29

定価 四、〇〇〇円(送料共)

## 1989年版目次

|   |     |        |       |
|---|-----|--------|-------|
| あ | 一   | に      | 二四九   |
| い | 一五  | ぬ      | 二五四   |
| う | 四四  | ね      | 二五五   |
| え | 五三  | の      | 二五六   |
| お | 五六  | は      | 二六〇   |
| か | 八三  | ひ      | 二七五   |
| き | 一一〇 | ふ      | 二八二   |
| く | 一二〇 | ほ      | 二九四   |
| け | 一二七 | ま      | 二九九   |
| こ | 一二七 | み      | 三二三   |
| さ | 一四〇 | む      | 三二七   |
| し | 一五九 | も      | 三三〇   |
| す | 一七四 | や      | 三三七   |
| せ | 一八五 | ゆ      | 三五六   |
| そ | 一八八 | よ      | 三五七   |
| た | 一八九 | り      | 三六五   |
| ち | 二一五 | ろ      | 三六六   |
| つ | 二一七 | わ      | 三六六   |
| て | 二二三 | 出詠者住所録 | 卷末一七七 |
| と | 二二四 | 後記     | 卷末    |
| な | 二三一 |        |       |

あ

阿川千恵子

支笏湖

子とわれの一つ船ゆく支笏湖に真陽森閑と群青の上  
森閑と昼の陽高き支笏湖上アイヌ伝説聞きつつ渡る  
水深三百六十余カルデラ湖なる群青の妖しさ漂ふ昼の支笏湖  
並みよろふ湖を囲む樹立ふかぶかと繁みに照今もひそむか  
オコタンペ川そそぐ水際の水澄みてひめす育くむ支笏湖深く

阿部昭子

すすき

穂芒がつめたくゆるる霜月の終なる叫び耳に峙つ  
裾野吹き分けくる風にみださる万の芒穂揃ひて老いぬ  
冬空に幽かにかすみ漂へる忘却めく立つ樹いしぶみのごと  
山肌の雪はまだらになだれつつ裸木杵となし織布を見す  
寒飛沫あげてサーフィン二双ゆく若さはなやぐつなぎの姿

阿部麗水

郷愁

墓も建て当地に果つる決心を乱すよ秋の夜の郷愁  
慕ひきし父母も世になく秋晴れの沖航く船に帰心そそらる  
塹壕に友と名月仰ぎつつ祖国偲びて語りし遙か  
エトロフに本籍置きて望郷の友は展墓を果たさずに逝く  
秋風に戦野流れき朝鮮の慰安婦うたふアリランの歌

阿部一直 \* 己が繰り言

魂のごとさ庭の闇をうごかして浮いているなり白あやめ花  
告ぐるべき対手もあらぬ夜半に覚めひそと聞かんか己が繰り言  
歟頭たりし気負いも杳かにて思いもよらぬ今日の腰痛  
いつしらに吾の体力翳り来て畑打てば息大きく乱る  
掌の脚の萎えて動かずなりし日が零細農の吾の定年

阿部十三

波紋

沼の面の波紋しづまりゆくときに何か聴きたるごとき思ひす  
抜きかたきエゴとふものを妻にさへ言はれしときにわが憤る  
謔言に何をかわれは口ばしるこころの奥をみづから知らず  
うつしみの量感として寝返りを打つたび古きベッドの軋む  
蒼空の奥は漆黒の闇といふその果てはつひにしらず焉へむか

安部 匠司 猫

声あまく足に纏はる猫ぬくし夜の厨に明日の米研ぐ  
ヒマラヤンの仔猫餌づけむ指染めて鮪の粗を厨にさばく  
川土手の芒穂に立つさやぎあり振返り猫返り猫捨ててきぬ  
西山に没る日にはやく暮るる庭捨て来し猫は庭にもどれる  
コーランの祈りのごとく猫は臥す部屋にうつろふ冬日に向きて

阿部 秀一 暫し間あらむ

双眼鏡を提げてぶらりと山に來ぬ職退きてよりの第一日目  
職にして汚れしものが乾くまで暫し間あらむ雀と遊ぶ  
向ひ家の人は真面目な消防手消火栓より先づ掃きはじむ  
老いて二人住みゐるなれば遠くより娘ら來り硝子窓拭く  
現はれてまた消えてゆく星もあらむある抽象を思ひあるとき

阿部 米子 東尋坊

積む雪に尚降りしきる東尋坊前をゆきます風狂の人  
悪僧の此処に打たれし東尋坊冬の波濤の牙剥きて寄す  
日本海の浪被りつつ並び立つ柱状節理聚落に見ゆ  
編集の部屋に入り来て青蛙机の上に置物となる  
よき顔にならねば歌を学ぶ意味なしと或る時師の言ひましぬ

足立 早苗 亡き友

逝く友を悲しむかの如郭公の鳴きては止まず時雨る中に  
よしきりの鋭く鳴ける曉まちて帰らぬ旅に友は発ちたり  
彼の木立過ぐるあたりに吾が友の奥つ城のあり梅雨蟬の鳴く  
巡る忌に黒ずむ友の奥つ城へ在りし日の如呼びかくるなり  
問ひかくる言葉は空しく吾が耳に返り来るのみ友の奥つ城

足立 春美 \* スプーンの音

見えぬ眼が生きて痛むもこの朝は臥所にまでも届く雨音  
侮蔑する人に再び会いたくは無いと手引きを娘は断るも  
娘はつつましく夫の愛を語り呉るる聞かされていて淋しくなりぬ  
夜の更けに卓のスプーン取り落すとがむる妻は風邪ひきし声  
残像のとぎれとぎれに見ゆる夢覚めて布団に爪立てている

足立 弘子 \* 煌めき

美しき恵みの葡萄高らかにしのびよる冬の前奏曲  
するすると唇の中に吸い込まれ小粒の葡萄は体内滑る  
傍にワイン発酵しているや体内血脈色濃く騒ぐ  
掌にワイングラスは温もりて星の一つも煌めきて見ゆ  
花店にさくらぐコスモス輸入というロスに在る娘の風を感ずる

相野谷森次 \* 岩桔梗

岩桔梗の紫淡き花見れば霜ふかく置く朝も無かりき  
少年の頃に常食とせる粟が小禽の餌に町にて売らる  
揮毫せよと地方の友が届け来し木曾の檜の表札匂う  
拡大鏡使わねば校正すすまざる眼冷めたき水にて洗う  
誇るがに見えし愛国婦人会九段通りにその跡も無く

相原清美 \* くらき冬

表情をすべて失う夫の顔時に疎まし不意におそろし  
週間に薬の種類いくたびも変れりもはやモルモットめく  
尻に二本打つ注射液何ならん不意に上体起き上がる夫  
分ち合う言葉なく吟ずる朗詠に夫が和しおり茂吉の短歌  
足萎えし夫を見やれば義足して歩む人さえ羨しと思う

相原健一 雨季の頃

コンバイン乗り操れる人びとの麦刈日和つづきてあれな  
麦刈の済みたる田居は上手よりひき入るる水のおもて輝く  
人かげの小さく見ゆるトラクター行きつ戻りつ代土均す  
雲厚くとざして暗き梅雨の庭さるすべりのみ赤花点す  
梅雨明けは四五日先と聞く予報花浜木綿の白はくだちぬ

青井和子 欧州紀行

剣闘士野獣観客コロッセオいにしへの夕日脚もとに差す  
BCの建築なりとふ神殿のこぼたれし円柱にからすの一羽  
洞窟を出づればまぶし罌粟の花揺らぐかたへにマリア石像  
マロニエの花はま盛りシャンゼリゼを小雨に濡れてホテルへ帰る  
葡萄園の広がる道をバスはゆく今し見えくるレマン湖の碧

青木きね夫 幻

「ねむの木」の子らが描きし絵 じつと見る車いすの青年ひとり  
一面の淡きがなかにおのれ置き夢幻を描ける「ねむの木」の子は  
建てかはる木造校舎のガラス戸に実の成ることく子ら窓を拭く  
橋成りて逆白波の立つあたり掬ねたる竜が縛がれてゐむ  
心平の蛙・芭蕉の蛙たち寄りて思索す秋の池沼

青木幸一郎 \* 妻

病氣持つわれもさそわれて猿ヶ京の宿におちつく薬持参で  
好きな酒は呑めねどはしゃぐ妻たちの振舞いみれば心は和む  
おどり踊る妻の姿態の美しきわれを忘れて見入るひととき  
冷えしこの手に妻の温もりが伝わりて沈む心を満たしてくれぬ  
病氣持つ我を勞りてくれる妻、妻あれば闘病の日々も明るし

青木美沙子

夕べ鍵さす

医師の甥が何言ひしならむ帰り来し夫は無言のままに久しも  
分別は幼時に戻り物乏しき古き時代に心在るらし  
特効の薬とてなき老の坂速度加はり転びゆくなる  
撲ちてやりたき思ひ走れど骨と皮になりし肢体の何処を打たむ  
訪ふ人もなく一日を終りたる朝開けし門扉を夕べ鍵さす

青木よし江

産声高く

帯の祝すみたる嫁は立ち上るたびにかはゆきかけ声をかく  
初孫に贈るおくるみのサテン地に千人針のごとくキルトす  
家びとの願ひかなひてこの朝女の孫生れぬ産声高く  
ベートーベン好める夫の見舞にとその歌聖の名のシクラメン賜ぶ  
わが町に第九合唱の集ひあると喜ぶ夫を見るはうれしも

青木陽子

夏の日

さくらばな浮かせて流るる川に沿ふわが胸底に水音の冷ゆ  
ぬくき雨若葉を濡らし身の裡を濡らして過ぐる明日は母の日  
並びたるショーウィンドの時計みな梅雨の晴間の街の時刻む  
地下街を出でて眩ゆき夏の日にそばだつビルの影縮みぬつ  
逆らひたき言葉抑へむ窓外の白萩風の向きに撓へり

青野うた

身辺

シンピジウム次次咲かせられてゐる娘を持てりわが冬の日に  
暖くなるを待ちゐて物干せり冬はゆつくりしてゐてかわく  
手をつきてやうやく立つに至れるを自然の事と医師に諭さる  
悪くならねばそれにてよしと慢性の老人病を医者に言はるる  
伊賀上野伊勢松坂に行けざりしこと思ひつつ加速度に老ゆ

青野智道

雪の夜

雪の夜は早く寝ねよと耳遠き母が座を立ちながら繰り返す  
庫裡新築の記念に贈られし掛時計が太声に鳴れり奥の部屋にて  
亡き人のみ前に枕経まゐらせぬ縁といふをわが思ひつつ  
僧ゆゑに譲られて横座に坐りゐつ亡き人の前に読経済ませて  
大の名を呼ぶ幼子のととののはぬ発声にすら心ふるへぬ

青柳絢子

五首

温き部屋にテレビの相撲楽しめる夫言ひ出でぬ父母のこと  
やがて人恋ふ日もあらむ女の孫の朝幾度も髪を梳き居る  
行く当てもなく夏のブラウスを買ひ来て病める夫には見せず  
体弱り難も飾らず節句迎ふ孫に詫びつつ難に詫びつつ  
足弱りし我かと思ふスーパ一の帰りの道を地藏堂に休む



青柳 猛 霧

平成元年一月八日のあたたかき雨の朝の舗道を歩く  
輻車の行く青山通り三丁目櫛の冬木に霧はけぶれり  
われの顔ゆがみてうつる道路鏡を振り返りつつ路地に入りゆく  
雉子鳩の声をこほしみ入り来たる冬づく山の木の実動ずむ  
がまずみの枝ゆきふりて飛び立ちし椋鳥が銜へし実をこほしたり

青柳千萼 文はゆるりと

冬牡丹風とがりては散りまどふ虚きをそらに放さふべしや  
幾そとせ独りあそびに揺れ揺りて梅の実酸ゆき朝もやにゐる  
銀カップ鈍き音して地に落つるさあれひと日の生のあかしを  
吊燈に限なくやかれ身のうちの苔むするあやゆるりと溶け来  
過誤ひとつ拾ひて過ぐる峠みちこそこの木の実の潰えずにをり

赤井清子 五首

蛇踊りの若人の呼吸はげしかりうけ継がれゆく芸は生きをり  
蝶々さんカラユキさんの物語聞きつつ平戸の朝は晴れたり  
呆ることなくて読書が出来るやう太宰府天満宮に希ひ詣でぬ  
戦争を知らぬガイド嬢原爆の被害を語る声つまらせて  
加太の沖真下に見えて揺れもなく長崎の旅まもなく終る

赤石治子 五首

さらさらとかすかに鳴りて乾きゆく我が洗ひ髪五月の闇に  
お菓子に似る白き家建ちヘンゼルとグレーテルならぬ人等が仰ぐ  
しら玉か五月の大地に生じたる大蒜の粒剥けば光れり  
生殖のさびしきまひる花々は舌のごとくに蕊をのばして  
体液のしみを残して黒き虫花の上より落ちゆきにけり

赤川達海 うつろひ

宿題する孫の脊越しに筆箱をのぞけば匂ふ鉛筆の芯  
あぢさゐの剪られし枝々潤みきて若芽萌えつつふくらみにけり  
老人の「検診月間」已知のひとのにはかに増えけり今年の秋は  
地価騰り予期せぬ処世迫り来て戦後期に似し思ひするなり  
遺すべき相続の工事決めてより折々画集に見入るなりけり

赤沢幸枝 \* 五首

息子を送り帰る街並み明明と賑いの中に孤独きわまる  
心には闇広がるも春の気が打ち寄せ野辺ははずみし色に  
みぞれやみ人影もなき家並みがくきやかに見ゆる遠く遥かに  
古樹々と梢のまろ葉がかげ落す山肌は寂しくほのかにゆるる  
水雨降る武蔵野陵の森は暗く尽きぬ憶いに昭和を送る

## 赤津健寿

こもりくの初瀬乙女

いにしへは遙かに遠しこもりくの初瀬乙女はいづくにありや  
一点の雲なく晴れし天心に雲煙の思ひ立ち上らしむ  
究極のものを見たりし人の目のらんらんとして夕陽に光る  
わらべ歌の哀歎にはうと包まれて古き都の径の辺に立つ  
覚めてゐる窓辺を濡らす旅の雨飛鳥とはかくなしきものか

## 赤松伴子 \*

銀の食器

湿りもつ梅雨の厨にこもりいて銀の食器を磨くかなし  
逆縁とう事しみに思ふとき命一つに重き秋霖  
一刻の驟雨すぎたる石畳哭くだけ哭きて渴くごとしよ  
言えざりし言葉のむごと紅のホクシャの花の芯はむらさき  
こだわればきりなきものよ・山畑に冬とぶ蛸がつきてはなれず

## 赤松元敏

寒の陽

雲の間をきはだたしつつ赤光しやくくわうの帯は立ちたり陽のいでむとす  
日輪は己が炎をめぐらせて昇りゆくなり寒の朝明を  
寒の野をいづる陽のありまさしくも大きいもの火はもえにつつ  
寒の野をいづる陽いひ蔽しわが生せいに成すべき二三絞りて思ふ  
寒の野を炎めぐらしいづる陽よとちし目蓋になほ燃えさかる

## 赤松宜子

獅子舞

舞ひ終へし獅子の中より思はざる少年の顔上氣して出づ  
旬日をこだはり続けりし思惟を断たむと畑に深く鍬打つ  
右耳のやや遠き夫の左手に蹴くが慣ひとなりて久しき  
寄りて来しやせ野良犬に声かけて歩みゆく道風花の寒し  
帽子一つ行方知れずになりしまま長かりし夏の終らむとする

## 秋永正枝

独りの余生

あはあはと独りの余生送り居りやがて崩れむ時思ひつつ  
あきらめず歌を詠みつく努力こそわが生甲斐につながりゆかめ  
いつの間に置き忘れ来し歳月かアルバムに笑む十八の春  
うめざりし寂しきもちて拾ひ上ぐこれの毛毯のあざやけき朱  
ほんの少し君の知らざる部分もつ吾が心なりひとり遊ばす

## 秋葉雄愛

白馬岳

地を這ひて咲く石楠花のたをやかさ乗鞍岳の華とぞ思ふ  
雲海へひろがるお花畑には羽毛なびかす雷鳥遊ぶ  
敵なす尾根の道の辺駒草の一叢咲きて霧にただよふ  
夕づきてケルン建つ辺に人影が黒くゆつくり登りくる見ゆ  
アルプスの野の湯にあれば乙女らが豊かなる胸抱へ入りくる

秋本文武 \* 綾香三歳帯結びの祝い

タオル巻き「オヨメチャン」と帯結び祝い近づく綾香よとわに

一番目小西綾香と七五三昇殿詣り友引快晴

玉串は尻込みしても乾杯は進んでやると綾香の出番

「マーン」と言う綾香のTELが耳につき木枯の夜もほの温かき

苺ミカングレープ画けと新クレヨン差し出す幼嫺を作りて

秋元千恵子 \* 存在

首立ててきたるは何ぞ風のなかわが存在を撲たと来たる  
運ばれてきてわが店にのびやかにいる小松菜の葉を食める虫  
居眠りて虫のごとくにいたりけり声なきにわが怖れて見れば  
摘まみいだし穀象虫ぞとゆずらざりし母を思えば一碗のめし  
仔猫らは虫追い詰むる眼して落葉の山の上におりける

秋山美恵子 五首

優しさの限りなき花けふひと日花しぐれゆくさくららの生  
朝なさな森林の気を存分に吸ひて水無月晴れ間爽やか  
斉庭辺をひたすら掃かむいとなみの生の水を忘るなかれと  
こんもりと抹茶の翠瀬戸の焼茶盃に点てるを清々とうく  
再びは来れぬと言葉交しつつ脳裡かすむる犠牲の戦士

鮑浦 幸子 石見の海

石見角の彼岸花すでに闇けにけり人暦もその妻もはるけく  
海に向き低く並べる赤屋根の石州瓦を濡らす時雨は  
城はろび石段のみを残す丘秋は桜の落葉を降らす  
あかあかと没む秋陽をかなしみてただよふとし旅のころは  
石見の海は漂ふ神の寄るところ夕光落ちて真砂ひかれり

浅野妃都美 ふるさと

港町の人ら商店街の縁台に将棋たのしむ夏宵は来ぬ  
還暦を今日祝ふ家暁を赤々と二階点りてゐたり  
遠洋の漁場に発つと週刊誌数多買ひ行く春雨の朝  
内孫の末寿ぐと君が建てし大職鯉職はたはたとなる  
一歳と九十一歳の干し物が隣り家同志秋深み行く

麻生 倫子 鮠

散るだけは散り尽したる唐櫃の冬空きりて寂けく枝張る  
幼児は日々知恵づきて会ふたに知つてゐますといふ顔をする  
桐三樹夫・中西勝を喪ひし三月桜の花はいまだし  
岩を這ふ鳶のくれなゐ歌会に運よく占めし席より見えて  
秋の陽に鮠ひよつこり迷ひ出る野に沿ふ吾が家の親しきならむ

浅川かね子

移りゆく季

わが窓を開ければ風の風ぎてゐて移りゆく季を実に結ぶあり  
踏み跡の粗く残れる砂浜に逝かむとする季の陽ざし浴びをり  
何を待つといふにはあらねばたん雪舞ふ窓を母はベッドに見をり  
枕辺の壺に胡蝶蘭あふれ咲き母は香けき少女期を繰る  
通り来し道明るしと曲り角に見たるは束の間一寸先は闇

浅川喜代子

登呂遺跡

温暖な駿河の国に住みにける農耕民族の古代遺跡  
倉庫には何を納めし二千年前高床式に復元のさま  
駿河路に風透りゆく広大な登呂の遺跡に椎若葉みあぐる  
古の農耕文化の用具などあまたがならぶ登呂の遺跡に  
つぎ足して土器の高杯型なす縄文時代の彩の見事さ

浅川 広一

モノローグ

机の上に粗きひかりのいくたびかさぎゆきてわが充足はあり  
失声の夏と言はむブラタンの並木のもとをデモは行きたり  
なごまざるころにあゆむゆふまぐれ舗石の罅は静脈に似て  
一瞬に影かさなりて離れゆきなつたそがれのわがモノローグ  
晴れずのみ物ぞ悲しき幻影としてフィレンツェの秋の雨あり

浅原 春枝 \*

負担金

平成に変われど曳きずる重き枷肉親求め孤児は訪い来つ  
昨日までは産卵を遂げ忽然と鶏はひとり白き目閉じぬ  
負担金呑みゆく圃場画一に整いて眩しく日を反すなり  
早馬の駆けゆくごとく日は滑り平成初の雛節句も過ぐ  
庭に根付きし椿の蕾もふくらみてわれにめぐれり季節今年も

朝倉 史耕

大白鳥

大白鳥人に媚びざりねだらざり浮きゐる餌を一呑みになす  
近寄りてゆく子供らには目もくれず大白鳥らの「平成」の朝  
土手にゐる群あり湖面に浮かぶあり平成元年の朝の白鳥  
土手にゐる大白鳥が羽づくろひなして羽撃く何思惟せしや  
白鳥の光るにもはずまぬ女をり哀しき憶ひを秘してやをらむ

浅田 雅一 \*

五首

啄木が少女と逢いし萩浜に歌碑立ち永遠に老いぬうたびと  
久女の開ききれざる情念か小さき墓の黒く艶めく  
何色にも染まず生ききてしみじみと独りのときは赤き色欲る  
良寛と嵯と貞心尼ときれぎれに想うも一つとなりて美し  
直立の庭の樅の木誇らしげに見えきてクリスマス近づきにけり

浅羽 芳郎

白杵石仏

伏せ給ふ半眼のぬくみ受くるがに仰ぐ磨崖の大日如来  
幼らの遊びゐし空地の明るさは磨崖の仏を仰くわが位置  
過ぎし日の地震に落ちたる仏頭の石の温顔に救はれてゐる  
おほひたる軒狭ければ秋雨は仏の裳裾黒く濡らせり  
秋雨にうたるる池の朱泥より生ひたる蓮を鬼蓮と言ふ

浅見 幻影 \*

飯豊連峰

はるかなる本山みつつ西俣の尾根にわれあり世を隔つごと  
ダイグラと梶川それに丸森の尾根筋なべて鋭しという  
竊馬の模様に似たる残雪が東に向きて輝きそめぬ  
銚立を楯となしつゝ対峙する杵差きりさしよりかなしきはなし  
吾子ついにICUに合格すこのよろこびを飯豊に告げむ

浅見千太郎 \* 我執

生と死が妖しく絡む夢さめて心拍音に触れる朝明け  
保証なき生命保ちて営みの日々うとましく風の音聞く  
雲流るる野に佇つ吾の翳枯れて墓標に残る性をかなしむ  
もどり来し意識確め佇つ庭に夕光寒く淡々と射す  
空間に流るる刻の速くして頭髮の白日増すもかなし

浅本義一郎 \* 沙羅の花

山の駅に汽車とまる間を冬木より雪の片々落つるかそけき  
葬られて壊れし君のみ骨なり指は組みたるままにて織はく  
たそがれの庭灯籠の灯の沁みてぼつぼつ白し沙羅の木の花  
幼らとその母乗れる観覧車仰ぎ手を振る老い二人して  
初雪に遇いたる紅ばら痛々しただちに剪りて瓶に咲かしぬ

芦田多喜子 灯

遠き窓々に洩るる灯を愛しみつつ一日のカーテンを閉す  
自問自答つゝに暮るる此のひと日ビルは初冬の灯を点したり  
小児科の医院に遅き灯の点り泣き叫ぶ児の声のきこゆる  
生命あるものの如くに誘ひて造花のバラは夜の部屋に浮く  
謎めける半月白く浮く空を光りつつ飛ぶ機の音重し

芦川 美枝 造成の丘

散歩ながら孫と裏山に来て眺む遠山脈の巨き入日を  
日の暮の造成の丘にはるかみゆ三輪編成の電車のあかり  
野におくを惜しみて摘みしひめじよをん枝先多の淡きむらさき  
日の没りて薄闇ひろがる土手沿に文なす芒の穂のみ明るし  
見はるかす山木々もはや暗みたり児の手をとりて弦月仰ぐ

梓 志乃 \* 裸身染めて

一夜 湯のあふれが刻むリズムさわさわと眠りの中へ  
広々と湯槽に溢れても溢れても透明になれぬ哀しみも持つ  
月明かりの岩風呂に髪をとき放つ ゆらり影が人魚になる  
湯槽にゆったりとさらす裸身気ままに 男などいらぬ  
匂いたつ岩風呂の湯 満天星の紅に裸身染めてひと刻を

穴沢 芳江 つはぶき

まぼろしの楼蘭古城のすな丘に人付てるゆゑ寂しき写真  
ふるさとの鈴蘭言ひて息絶えし兵ゐき沖繩戦六月めぐり来  
繰り言はつね独りごと株分けのつはぶき老母と共明りせる  
みほとけの面輪わすれし日の唇にぬつてゐたるは鶏冠のいろ  
寒の水ゆらりゆらぎぬ一つのち大鯉のかたちに揺らぐ

天児 都 冬のひまはり

「幸せの木」といふをもらひ来たる子に幸せの兆みたきこのごろ  
秘かなるつぶやき洩れむか箱のうちに飾り櫛並べ闇が包めば  
室生寺への山道に聞く鈴蘭の香に馬降りし帝王後醍醐  
幼児の並びて笑みを送るごと冬のひまはり部屋隅にあり  
わが子らに沙漠にて生くる力などつけざりしことに思ひいたりぬ

天野 一夫 \* 花の棺

いけばな稽古終えし花屑収めたる花の棺と言わむ木の箱  
失われゆくも美しかなしみの花の棺に朝の陽匂う  
かえりみる人さえもなく朝の陽に花の棺は集塵車待つ  
集塵車を待ちつつ朝の陽に匂う花の棺に彩あふれたり  
美しくほろびし嘆きにじませて花の棺はかがやきてゆく

天野かなゑ 野ぼたん

透きとほる秋のまなかに淋しさを凝結させて吾と野ぼたん  
夕茜さす野に見たり渡り鳥遙けく点となりゆくまでを  
さりげなき夫の言葉に拘はりてガラスに走る冬雨みつむ  
雨やみし後の川面を渡る風あらし波動の旋律を生む  
川の面に絶ゆるともなき変幻の水と光のたはむれをみる

雨谷 弘 木通実る

熟れきりてはらわた見する鈴なりの木通の実こそ小鳥らのもの  
いちちはやく葉をおとしたる山桜木通さがりて小鳥にぎはし  
休猟区となりしを知るか雄雉子は悠々よぎる朝の歩道を  
栗園に植ゑし茗荷はしげりたち花ふるはせて茗荷茸出づ  
米余り減反の世と思へども雨の長きに水漬く稲穂は

綾女 正雄

浜の残照

網引きする声勢ひにしふるさとの海に人なし残照に立つ  
暮れてなほ天くれなるの浜明るし雲に滲みて月の見え初む  
さざ波のごと風紋の影移す夕風立てり羽合野の浜  
しづかにも暮れゆく浜に心澄み己れのみ知るわが孤独感  
落葉はくはき目何時しか消ゆること残す何なき我が名も消ゆる

鮎貝久仁子

天を截つ

砂浜に白白沈黙の貝殻は魂あるごとく月光に吼ゆ  
紙端にて指を切りし冬・天を截つ刃物のやうな月の澄明  
彼岸花・花火のやうに消え逝くも葉は甦りまた花と化す  
何かしら言ひたき事はその儘に落葉となりて止めどなく降る  
長年を拍子木打ちて廻りたる熟男は急逝・風の音が響る

新井 章

中国研修

ガラス戸を雨のつたはるこの夜更け学生一人物さげてくる  
若きらの帰りゆきたる一人の部屋に茶を飲みて寝る今日の終りに  
雲の層貫ける時機はゆるる二度三度経て青みたる空  
この雲の下はいまだに雨なるか雲照らす朝の光にいづる  
下流より吹きあげきたる霧すぎて川の面は光をもてる

新井 正夫

出雲崎

出雲崎今日恵まれており立ちぬ良寛堂をそがひに見つつ  
ここに於て沙門良寛生まれしか弥彦の山は指呼の間に見ゆ  
山空は晴れに晴れたり鳶一羽舞ひ来てやがていづこへか消ゆ  
以南句碑めぐりてわれも見えてゐたり友の拓本とり急ぐさま  
空の青海の青とが一線を画して風げり日本海は

新井 豊子

舗道

腰ふかく曲りし老婆自が足許見つつ歩めり舗道の端を  
息急ぎて登る坂道ぐみの実の赤く熟れしを三つ四つ含む  
木犀の散り敷く舗道に見上げたる目頭に花が零れて落ちぬ  
物を掴む形して路傍に濡れそぼつ作業用なるゴムの手袋  
もてなしの足らざりしこと悔みつつ己が影踏む見送りの帰途

新井 よし \*

観音講

観音講に男は留守がよからうと夫出でゆけり地図をかかえて  
盛られたるきんびら牛蒡のつややかに観音講の座席整う  
観音講に初老のおみなら集い来て夫の出征に泣きしを語る  
人並みなる願いを抱き松の内を地蔵へ赤き頭巾縫い初む  
午前一時男生れしと電話にて息子告げくる声はずませて

荒井 いく 雛祭り

春の雪はのかに煙る狭庭辺に十二単のあはれ咲き初む  
やや古りし雛人形を床に飾りにぎはふ今日の雛祭りの宴  
さいはての旅の宿よりいとし孫の電話うれしも我が誕生日に  
友よりの宅配便のらんの花静けき朝の我家華やぐ  
亡夫愛でし白滋の壺に花を生けて仏間に飾る春分の朝

荒井 謹三 \* 舞台

病軀おし舞台に立てば見慣れたる重吉は在り常と変らず  
僅かなる間合い袖にて酸素吸う痛々しさを視るに忍びず  
演出を兼ねる身なれば叱咤する声音はちから籠り鋭し  
移動するトラックに揺れ横臥する宇野重吉の凄まじ執念  
舞台こそいのちの限り俳優の生き態見たり宇野重吉に

荒井 静子 \* 人形

夏富士に影を落して白雲の移りゆくかも形かえつつ  
ハイビスカスの花芽次第に膨らめば開花待たるる残暑の庭に  
お宮参りの衣装が布団にかけられて幼子逝けり人形のごと  
三つ峠の屏風岩をあかねに染めしまま薄墨色に暮るる山山  
対岸の山をうつして山中湖の朝をしずかにもやの晴れゆく

荒井 文 雨月

時空超え人頭ち給ふあぢさゐ忌三十三年杳々として  
後れぬて襦袢纏へる老一人黄泉さしてゆく刻のあしおと  
幽世にわが坐すうてな無きものと現は虚空さまよふごとく  
ベルフラワー遺影に捧ぐるきのふけふ一万日のとき過ぎにけり  
玉あぢさゐこの純白は天上のものとし妬む地にあるわれは

荒木富美子 遠き丘

芝桜地に低く咲く花ながら光あつめて白のかがよふ  
芽ぶく柳しだる先のささ揺れにかこち心をいまは隠さむ  
一点となりて行く鳥森に待つは安らぎならむまなこを閉ぢよ  
遠き丘に落暉は今を燃えてゐむうすきはてりの雲のたゆたふ  
かにかくに野はいちにんの寂しさを包むに余る暖かさあり

荒川 ふく \* ソ連、アルメニヤ地震

エレバンの病院ベット足りぬと叫ぶ医師うわ言の少女そばに泣く母  
現時点五万人の内四万人の死者あると発表されたり悲しかり  
がれきの下敷となりし家族達たすけたまえと泣く家族あり  
救助作業に必要なクレーンをはじめ機材不足を訴える声相次ぐ  
半ば廃虚と化した市の惨状に言うべき言葉もない強きショック



有賀世治 学生

それぞれに歴史を持ちて生れ来る大学学部の特徴を見ん  
向学の心高ぶる入学式論す総長の目に涙見き

学生の注視の中に講議する九十分は疲れを知らず  
卒論に身を打ち込みし学生は何か尊きものを得し如し  
業を終へ社会に出て行く学生よ汝が才能に花咲かしめよ

有野正博 新年のこゑ

除夜の湖のかがやく月に声をあげ出でてゆきたり少年は佳し  
三の不動の凍るあたりに今し居む元旦一時のわが少年は  
この祖父のたぎち溢るる胸もあれ清けからむ禱りのなかに  
七十年はわれの敗惨しかれども照一隅のひとつことを知る  
月光の明る臥床にきこえくる森のふくろふの新年のこゑ

有田秀子 足に乾杯

八時間歩き通せし今日の足山のいで湯に遊ばせてゐる  
掘炬燵の床板足裏に叩きあつ一日ものを言はざりし夜  
四歳の足に逆立ち見せたるが襖やぶりに帰るゆきたり  
足首の繋る女が素敵だと言ひにし人をふとおもひ出づ  
洋裁のミシン踏みつぎエジプトの砂漠歩みし足に乾杯

有路八千代 夜空の翼

イヤリング一つ残れりその一つ夜は砂漠に光りてあらむ  
石仏を拝し仰ぎぬ閉ち給ふまなこより垂れし一筋の見ゆ  
まどかなる月に重ねしわが想ひ旅の洞窟み仏浮ぶ  
ゆくりなく逢ひしひとつらの白鳥の夜空の翼ひたぶると見ゆ  
亡き夫の持たざりしゴルフ道具あり息が住む家の玄関のすみ

安西彩乃 椿の里

仰ぐほど高きに咲けるくれなゐの藪の椿の花は小さく  
紅の花あまた咲かする椿の木の幹褐いろに太く伸び立つ  
冬と春の節を分くる日房総の椿の里に落ち伏す椿  
紅椿白玉椿咲く里に藁屋根朽つるひとつ廃屋  
白壁の落ちて荒壁見ゆる蔵瓦の屋根に椿花散る

安東桂子 ふるさと

連翹の咲きあふれたる苑に来て蝶追ひ合ひし友いまいづこ  
混み合へる車窓に幼顔よせて唄ふはいと春だ春だと  
「ふるさとの小野の木立」とテーラより流るる詩あり胸熱くきく  
山陰の苑にあふれし連翹の花明り今も我が裡に占む  
限りなき空の青さよ今一度わがまなかひに君願ちて来よ